

書家・中林梧竹と横浜	p. 1
お知らせ/創立 90 周年事業/講座・講演会	p. 2
テーマ展示/子ども向け行事/おはなし会	p. 3
はまっ子読書の日/ボランティア講座	p. 4
ホームページ http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/library/	2011年10月号

 平成23年6月、横浜市立図書館は、創立90周年を迎えました。

書家・中林梧竹と横浜

中林梧竹(1827-1913)は肥前国小城(佐賀県小城郡)に生まれ、書聖と謳われた人物です。18歳の頃江戸で学び、30歳で小城に戻り藩校の指南役となりますが、40歳代半ばで一切の職を捨て、中国に渡って古典を学ぶなど探究を続け、数多くの傑作を遺しました。また、様々な書体を巧みに書き分け、その文字や詩句の意味を書で表現しています。

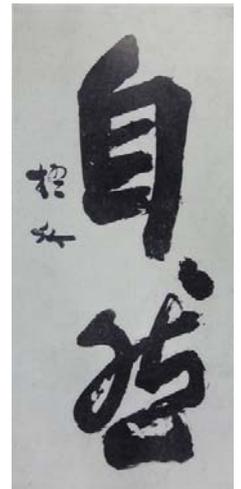
横浜市中心図書館では梧竹の書を20点ほど所蔵しています。梧竹と横浜の関わりと、所蔵作品の由来を紹介します。

中林梧竹は、開港以来活気に満ちていた横浜には度々遊びに来ていました。当時中区吉田町に住んでいた鈴木伝次郎と梧竹は江戸で知り合い、伝次郎が江戸の筆墨紙の店での丁稚奉公を終え横浜に移った後も親交は続きました。晩年は、その書の良き理解者であり一大コレクターである海老塚的伝の別邸「朝爽夕佳亭」(西区戸部)に1年ほど滞在し多くの作品を書き上げました。梧竹の作品は半紙に書かれたものから扇子、屏風に書かれたものまで横浜市内の個人宅にも所蔵されていましたが、震災、戦災のためにその大半が焼失してしまいました。

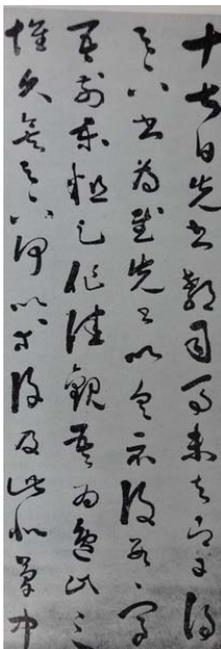
その中でも奇跡的に残った当館所蔵の梧竹の書について、『中林梧竹目録』(1968年2月、横浜市図書館【中央図書館の前身】発行)の中で当時の中村八郎館長が「本館所蔵梧竹作品の由来」を書き残しています。

『神奈川の旧石井本陣の襖は梧竹の書で有名であったが、明治中葉、家運没落後二三の人の手を転々としあちこちに移された。最終的には横浜市がこの建物を買って救護所(老人福祉施設)にした。しかし、関東大震災の火災により梧竹の襖も灰となってしまったと思われていた。ところが、幸運なことに当時のガス局長の公舎にあることがわかり、昭和15年3月12日の東京朝日新聞神奈川版は「梧竹の書」市宝に「焼けたと諦めていた神品現はる」と報じている。梧竹の書がなぜ焼けずに残ったかは謎であるが、横浜市として永久保存することとなり、有吉市長時代(昭和15年)、秘書課の職員が図書館へ「保管するように」と持参し、図書館で保管することとなった。しかし、その後、第二次世界大戦に突入し、図書館は戦災をまぬがれたとはいえ市会議場、市会事務局、日本軍、米駐留軍、続いて市の復興局等々に次々と占拠されてきたのであった。その状況下大混乱のさ中を書庫だけは守り抜き、これらの神品が無事に生き残り今に至っているのである。』

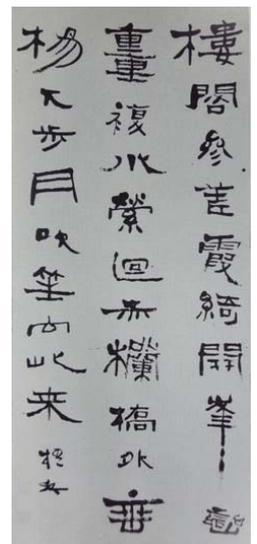
参考資料:『墨』1981年5月号(芸術新潮社)、『中林梧竹目録』(横浜市図書館、1968)



漢書の語 自然



王羲之十七帖の臨書



七言絶句

中央図書館では、所蔵する中林梧竹の貴重な書作品の展示会を開催します。この機会にぜひ、中央図書館へ足をお運びください。

<開催概要>

企画展示「明治の書聖 中林梧竹の書」

〔期間〕10月12日(水)～17日(月) 〔会場〕中央図書館1階展示コーナー 〔共催〕横浜書作協会